すずめのひな

昭和五十五年度　三年女児

夏休みにはいって、二、三日したある日の夕方、わたしと、おねえちゃんと、お友だちのけいちゃんの三人でかくれんぼをして遊んでいました。すると、おもいがけなく、草むらから、一わのすずめのひなを見つけました。

わたしたちは、前から小鳥がかいたくてたまらなかったので、みんなで、よってたかってそのひなのことを、さわったりして大よろこびしました。かわるがわる手のひらにのせると、ひなは、こわがってやわらかいからだをふるわせていました。

暗くなってきたので、どうしたらいいかわからなくなり、お母さんに相だんしました。

「こんなに小さなひなでは、自分でえさを食べることができないので、親がいないと死んでしまうから、かうことはできないよ。前にいた所に、おいてきなさい。」と、反たいされました。けれども、わたしたちは、ねこや犬に食べられるかもしれないと思って、はなすことができませんでした。どうしていいかわからなくなって、とうとう、けいちやんが家に持っていくことにしました。

けいちゃんのお母さんからも、わたしのお母さんと同じことを言われました。こまってしまって、また、わたしのお母さんにたのんでみました。そうしたら、「こんばんだけ、あずかってやるから、あしたになったら、前の所においてきなさいよ。」と言われました。それで、ほっして、わたしはよろこびました。

朝になったら、すごくすずめの鳴き声がするので、外をみてみると、鳥かごのすぐそばまで、親すずめが、口ばしにえさをくわえてきていました。ひな鳥も、親のことがわかつたのか、はねをバタバタ動かしながら、しきりに、ピーピーと鳴いていました。

わたしは、びっくりしました。どうして、子すずめがここにいるのが、わかったのでしょうか。

さっそく、わたしは鳥かごの入口をあけてやりました。すると、親鳥がまわりに気をくばりながら、ひなに近づき、口ばしでえさをやりました。わたしたちがかくれていないと、親すずめが鳥かごにちかよらないので、

かくれてみていることにしました。すると、親すずめは、何度も何度も、えさをはこんできては食べさせていました。

　このような日が、何日も続きました。あんなに小さかったひなも、今ではだいぶ大きくなり、歩くのも上手になりました。そして、時々は、はねを広げて、とぶかっこうもできるようになりました。

もうすぐ、親鳥といっしょにとんでいくことでしょう。そうなったら、わたしは、さみしいけど、ひな鳥のことを思うと、親といっしょの方がいいと思うので、しかたがありません。

　はやく大きくなって、大空いっぱい、おもいっきり、とびまわれるようになればいいと思います。その日までわたしの家で、かわいがってあげたいと思います。